

## IT 時代の英語教育

奥田隆一（和歌山大学）

このシンポジウムでは、以下の点を中心に IT 時代の英語教育の形態や可能性について論じた。

## 1. インターネットとコミュニケーション

インターネットを使って行われるコミュニケーションの CMC(Computer-mediated communication) には、2つのタイプのものがある。チャット(Chat)のように、コミュニケーションを行うもの同士が同時にコンピュータを使い、インターネットにアクセスして行う、同期型コミュニケーションと、もう一つは、電子メール(e-mail)、メーリングリスト(Mailing List)、電子掲示板(BBS)のように、インターネットに同時にアクセスしなくて良い、時間的にズレのある、非同期型コミュニケーションである。英語教育に取り入れて効果があると思われるのは、非同期型コミュニケーションの方である。

## 2. ハイパーテキストの利用

ハイパーテキスト(Hypertext)というのは、普通の文書のようにページ順に情報が積み重ねられるだけでなく、すべての情報が関連づけられて整理されたテキストのことである。これを使えば、ある文書に知らない用語がある場合、その用語をクリックすれば、その語の説明が見られるようになっている。その典型的な例が、ブラウザを使って見ることのできるテキストで、インターネットの WWW には無数のものがある。これを使えば、知識をより深くでき、あるテーマについてかなりなところまで探求できる。この英語で書かれたハイパーテキストを英語教育に使うことにより、新しい英語教育の可能性がかなり生まれてくる。

## 3. 英語教育にインターネットを使う理由

Warschauer, et al. (2000) *Internet for English Teaching*. は、英語教育にインターネットを使う場合の利点は、(1) 本物であること (Authenticity)、(2) 読み書き能力 (Literacy)、(3) 双方向コミュニケーション (Interaction)、(4) 活力 (Vitality)、(5) 主体性 (Empowerment) の5つだと述べている。ここで注意しなければならないのは、インターネットを使うことによって伸ばせる英語能力は、最近注目されている、話したり聴いたりする能力ではなくて、(2)のような「読み書き能力」であるということだ。この点をきちんととらえておけば、インターネットを英語教育に取り入れることにより、学生主体で、自分から英語を使うという態度や動機付けができることになり、非常に効果的である。

## 4. どのような授業が考えられるか

インターネットを活用する授業には、次のようなものが考えられる。まず、(1) 「英文で e-mail 書く」。これに関しては、教員に学生がメールを送るという形態が一番単純なもので、うまく行けば海外の人たちとメールのやりとりをすることも考えられる。メールに関しては、たくさん英語で書くことを中心にして、添削は最小限にとどめるのがいいようである。

次に、(2) 「WWW での情報検索をベースに英語でレポートを書く」。あるテーマを WWW の情報検索機能を使い、調べることにより、英語でのレポートを作成させる。情報検索をしている間に、英語の

解説を読む能力が養え、レポートを作成することにより、英語を要約したり、英語で書く能力が養える。

(3) 英語での WWW ページの作成をする。これに関しては、教員の方も、WWW ページの作成に関する知識や興味を持っていないとうまく行かないが、作成作業の段階で学生自ら英語をチェックするということがあり、また、WWW ページが完成すると、かなりの満足度が得られるので、特に、理系の学生にとってはおもしろい授業になるであろう。

## 5. 英語教育の未来

英語教育にインターネットを導入してどのようなことができるかに関しては、今までの英語教育の形態をどの程度まで変化させるかが決め手になる。インターネットを最大限に活用する大きな変化を考えると、(1) 遠隔授業の可能性、(2) 海外の人とのコミュニケーション、(3) 画像。音声の利用、などが考えられる。最近の技術と通信速度の向上により、インターネットをテレビ電話として活用することにより、海外との英語コミュニケーションを居ながらにして体験できるようになりつつある。

インターネットを最大限にはないが、活用する小さな変化を考えると、(1) 携帯情報端末、携帯電話の利用、(2) WWW での情報収集をベースにした英語の授業、(3) BBS の利用。メーリングリストの利用、(4) ホームページを教師が作成し、情報をためる、などが考えられる。ここで一番可能性があるのは、(1)で、ほとんどの学生が持っている携帯電話や携帯情報端末を授業に活用することである。これを利用すると、最新の英語ニュースなどを学生に即時に送り、それを使って教科書なしの授業ができるし、辞書を持っていない学生に携帯電話の i-mode や ez-web を使って辞書を引かせることができる。このような活用方法も今後の課題である。また、(4)のように、各授業に対するホームページで授業の復習や予習ができるヒントなどが掲載されていれば、学生にとっても英語学習の効率が上がると考えられる。

## 6. まとめ

インターネットが急激に発達し、われわれの生活に欠かせないものとなりつつある時に、これを英語教育に生かさないというのは、宝のもちぐされであるといえる。しかし、インターネットのどの面を英語教育に取り入れればいいのか、また、どのように授業を進めるかなどについては、まだまだ研究の余地があり、そう簡単に結論を出すことはできない。このことに関しては、たゆまず試行錯誤を繰り返して、最良のものを求めて行かねばならないと考えられる。

最後に、結論的に言えることは、教員の側が、今までの価値観だけにすがりついてはいけないということである。今までの価値観をどのように変化させて、現代の科学技術の一端であるインターネットと、どう共存して行くかが、これからの英語教育の課題である。